

谷崎潤一郎没後60年

谷崎潤一郎と芦屋—時を超えてめぐる物語

問い合わせ 国際文化推進課 ☎38-2115

関東大震災をきっかけに阪神間に移住

1886(明治19)年に東京で生まれた谷崎潤一郎は、1910(明治43)年、24歳の時に発表した「刺青」が評価され、文壇デビュー。東京で作家としての第一歩を踏み出した彼が関西で暮らすようになったのは1923(大正12)年の関東大震災がきっかけでした。

阪神間—西宮・芦屋・神戸での日々が始まり、この地の暮らしの中で『蓼喰う虫』[1928(昭和3)年]や『卍』[1928(昭和3)年]、『春琴抄』[1933(昭和8)年]、『猫と庄造と二人のをんな』[1936(昭和11)年]そして代表作『細雪』[1943・1944・1946~48(昭和18・19・21~23)年]など、古典文学の伝統や関西ことばの魅力を生かした作品を次々に生み出しました。

谷崎文学に登場する「芦屋」という舞台

代表作『細雪』で芦屋が舞台になっているのはよく知られています。しかし実は、それ以外の作品にも、谷崎潤一郎は芦屋の風景をたびたび登場させているのです。谷崎が初めて芦屋を登場させたのは、1927(昭和2)年に『文藝春秋』の1月号に発表した犯罪小説「日本に於けるクリップン事件」でした。

物語の舞台となったのは、大正の終わりから昭和の初めの阪急芦屋川駅周辺で、農村から急激に住宅地へと変わっていった様子が描かれています。

「(阪急電車の)沿線はつい最近にこそ急激な発展をしたものの、
当時は今の半分も人家がなかった。」

谷崎潤一郎「日本に於けるクリップン事件」『文藝春秋』1927年1月号

谷崎が見つめた「芦屋」とは、どんな風景だったのでしょうか—

「引っ越し魔」谷崎潤一郎と芦屋・打出の家

谷崎潤一郎は、関西に移り住んでから1923~1944(大正12~昭和19)年の約20年間で、なんと13回も引っ越しを繰り返した“引っ越し魔”としても知られています。その間、西宮・芦屋・神戸と阪神間を転々とし、芦屋には1934(昭和9)年3月から1936(昭和11)年11月まで、約2年半暮らしました。彼が住んでいたのは、現在の宮川町にある「打出の家」。1935(昭和10)年1月28日には、この家で最愛の松子夫人と結婚式を挙げ、谷崎にとって思い出深い特別な場所となりました。この「打出の家」では、『文章読本』(1934年)や『猫と庄造と二人のをんな』が生まれ、「源氏物語」の現代語訳にも取り組みました。そして実はこの「打出の家」、現在は「富田碎花旧居」として残されています。残念ながら谷崎が暮らしていた母屋は、1945(昭和20)年の阪神大空襲で焼失してしまいましたが、南側にある門屋(かどや)や庭の擬春日燈籠(ぎかすがとうろう)、松の木などは、谷崎が暮らしていたころの面影を今に伝えています。

現在、門屋は富田碎花旧居の展示棟として公開されており、谷崎が実際に執筆していた空間に足を踏み入れることができます。文学に生きた谷崎の日常を、ぜひ肌で感じてみてください。



関東大震災から逃れ、芦屋にたどり着いた時の谷崎潤一郎(1923(大正12)年9月)



小説『卍』に登場する開森橋の西詰にあった芦屋の名木「汐(潮)見桜」
〔絵葉書 1922(大正11)年使用〕



谷崎潤一郎と松子。結婚式のあとで
1935(昭和10)年1月28日



谷崎潤一郎の「打出の家」
現在の富田
碎花旧居の
門屋で、谷崎
は執筆して
いました。



ホームページ



谷崎潤一郎と松子夫人「打出の家」(現・富田碎花旧居)の庭で
1934(昭和9)年5月頃